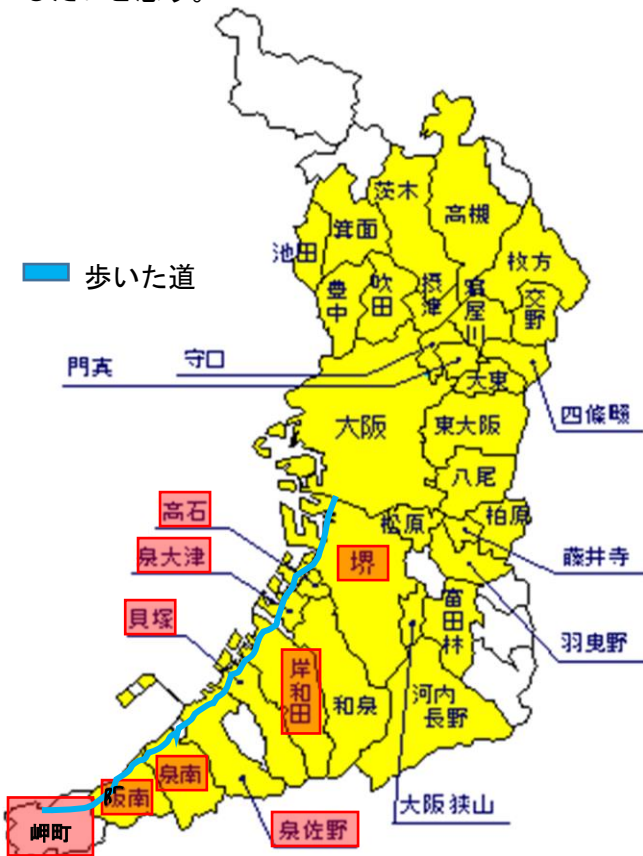


紀州街道を歩く（写真紹介）

（コロナ禍で三密を避けて パート1）

船 本 浩 路

私の住まい（泉大津）の近くに紀州街道（大阪市高麗橋～和歌山市京橋）が通っている。新型コロナウイルス感染症拡大で緊急事態宣言が出ていた時に、外に出て人影少ない道を単に歩くだけなら問題ないだろうと考えて、この街道とその周辺の海辺を中心に堺市から岬町まで歩いてみた。電車に乗ることには抵抗があったので街道近くにショッピングモールなどの駐車場をいくつか見つけて、そこに車を置きながら歩いては戻ってくることを繰り返した。そして、道中、気に入った景色をパチリパチリとコンパクトカメラに収めた。季節は4～6月、好天に恵まれ爽やかな風を感じながら歩くのはとても気持ちのいい時間だった。次にその時に撮った写真を紹介したいと思う。



堺～高石

堺市は市の誕生日が大阪市や京都市などと同じく日本で最も古い（明治22年4月）一つだ。堺は歴史書の世界では、特に中世は自治都市、国際貿易都市として、一流の町なのだが、実際、今の町を訪れると、看板倒れが多い。浜寺を始め白砂青松の海は埋め立てられ工業地帯に、町は空襲で焼けてしまったため多くの歴史的建造物は残っていない。残っているのは跡を示す石柱ばかりだ。また、私が中学の頃にはあった濠（土居川）の多くは埋め立てられ高速道路に変わっている。それらの犠牲のうに発展してきた堺、今回、久しぶりに歩いてみたが、町の風格というか歴史の風を感じることはできなかった。しかし、今、残っているものを再生して、何とか堺の歴史を後世に伝えて行こうという機運の高まりは町を歩いて感じた。特に、残された環濠（一部）の整備は進み、水質も非常によくなり、かつてのような濠からの悪臭は無くなった。また、この環濠を遊覧するクルーズ船もNPOの手で行われている。昨年は、百舌鳥古墳群が世界遺産に登録された。これらをベースに伝統・歴史を重んじる街づくりを進めてほしいものだ。





砂浜の向こうに埋立てによってできた工場群があった



かつては右上の写真にある防波堤の向こうには海が広がっていた。今は海ではなく工場群が広がっている。左下写真のちっぽけな砂浜は浜寺公園南に残された堺から岸和田間で唯一の自然砂浜である。運河を隔てたその向こうは埋め立てによりできた泉北臨海工業地帯である



紀州街道近くを走っている路面電車(チンチン電車)。最近では洒落た次世代型路面電車 (LRT) も目につく

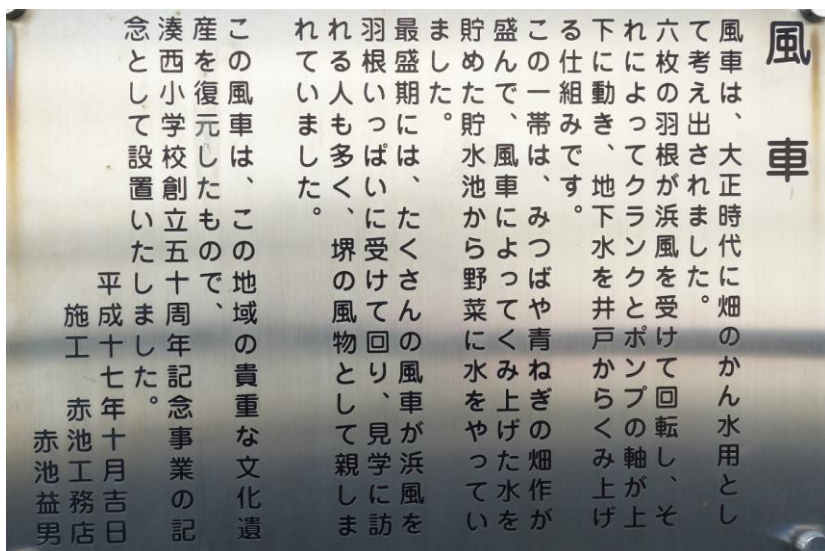


石津太神社の大クスノキ



石柱には紀州街道と書かれている



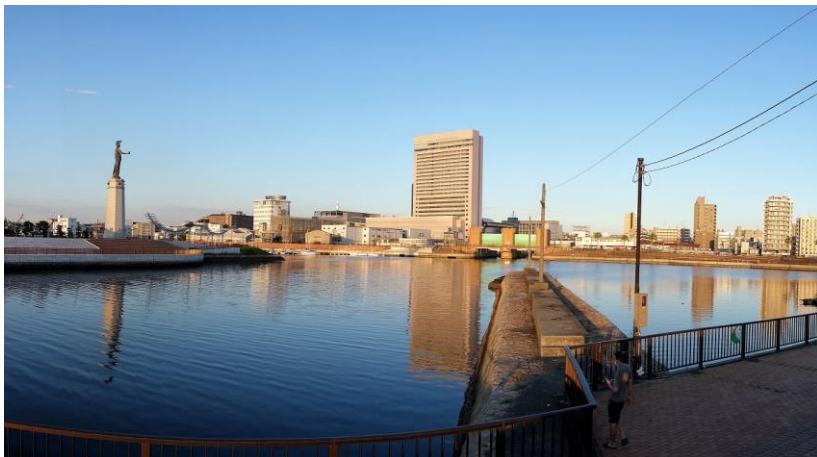
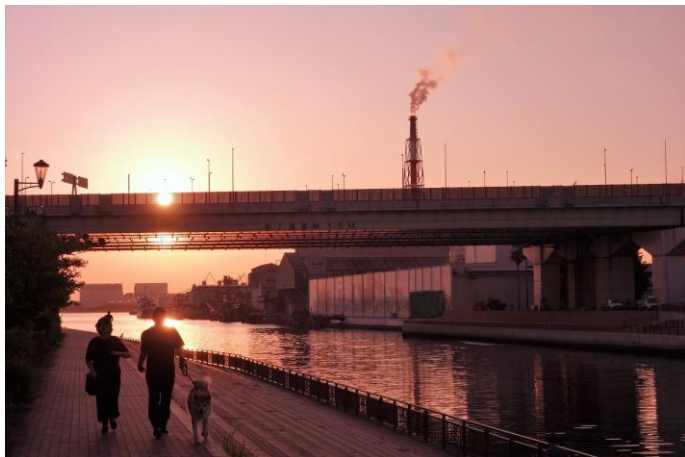


ザビエル公園（宣教師ザビエルが、堺に立寄った際に、もてなされたとされる豪商日比屋了慶の屋敷跡付近にある）

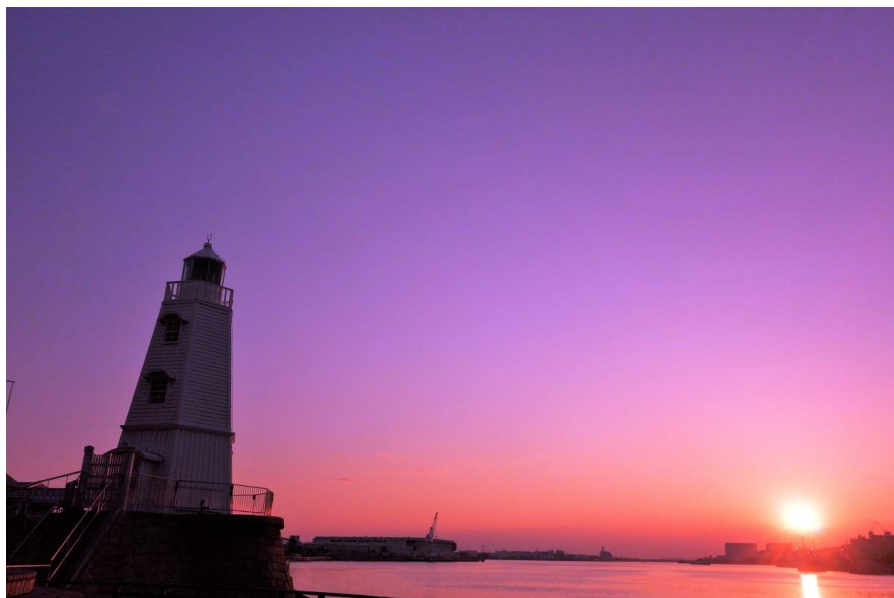


この道路の下に土居川（近世の環濠）が埋まっている

この道路の下に近世の濠が埋まっている



堺旧港とわが国の木造様式灯台では最も古いものの一つとされる旧堺灯台

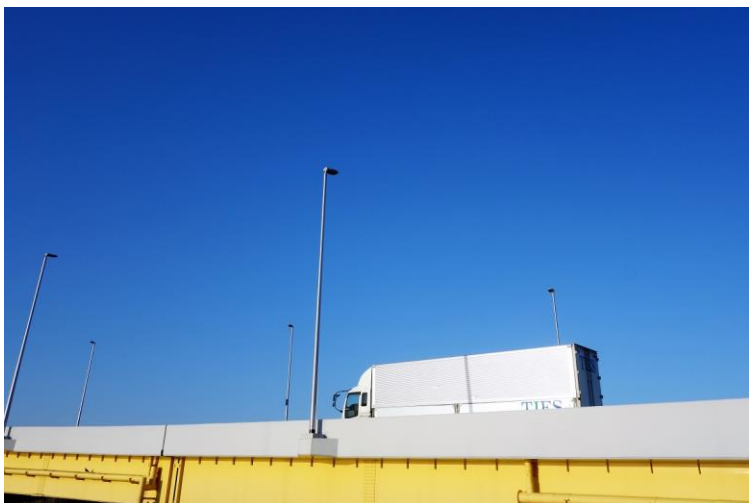
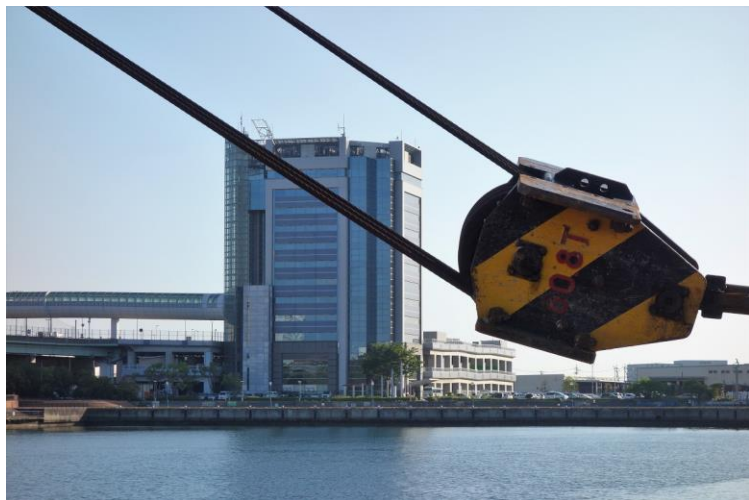


泉大津

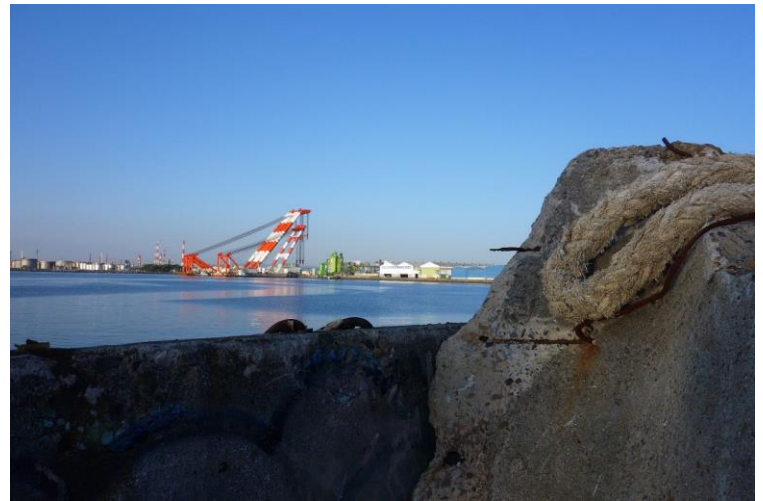
泉大津市は織物が盛んで、特に毛布の全国シェアは90%。そのためか、紡績や織物の産地に多く見られるレトロな「のこぎり屋根の工場」が見つかった。また、この町には、かつては、松ノ浜や北助松という白砂青松の海があった。今はその面影は全くなく、その海の景色も写真のようにガラッと変わった。子どもの頃に大阪湾の砂浜で泳いだ記憶がある私には寂しい限りだ。





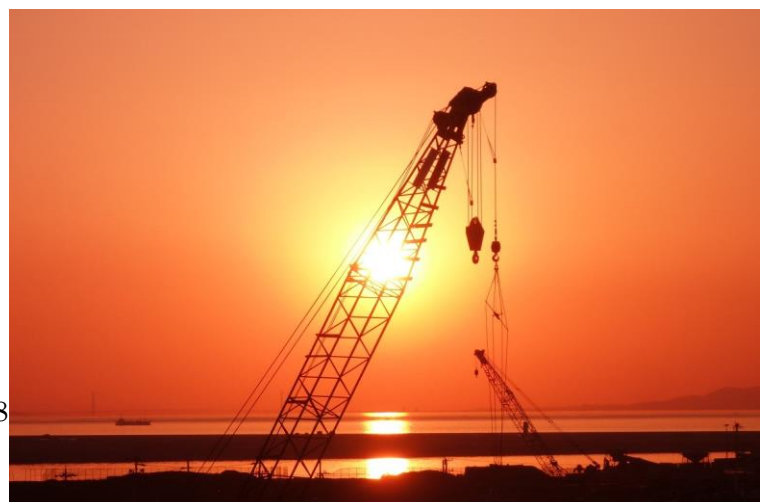
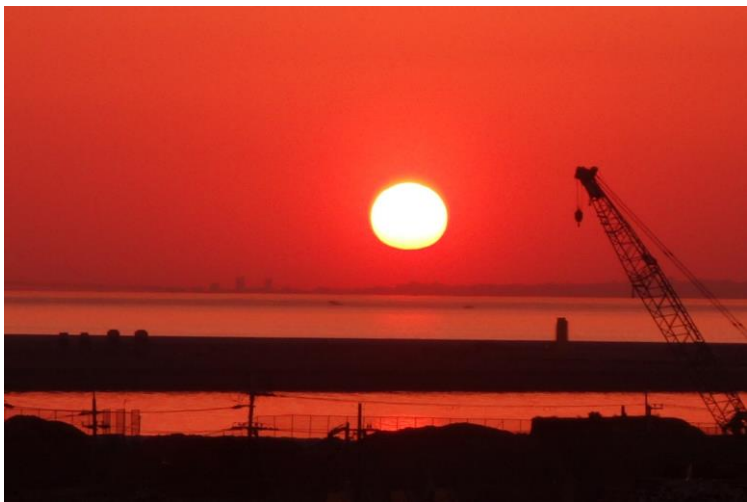


泉大津～北九州（新門司）を結ぶ大型フェリー、夕方、泉大津を出港すると早朝、新門司に着く



左写真は泉大津のランドマークとなっている泉大津駅前のアルザタワー。街中を歩いていると駅の位置がつかめて便利ことがある。

泉州には同じようなものとして堺にはホテル・アゴラ・リージェンシー堺ビル、泉佐野にはりんくうゲートタワービルがある。いずれも、ローカルな地にポツンと立っているので良く目立つ。



岸和田

岸和田市は泉大津市の南にある、かつての和泉国、岸和田藩の城下町。市の誕生は大阪では大阪市、堺市に次いで古い。ちなみに、それ以降は豊中、池田、吹田、泉大津の順である。堺以南の紀州街道を歩いたが、風情を残している町並みは随分と減ってきた。その中で唯一、岸和田市は少し保存に力を入れているのか、お城周りに古き街道筋の雰囲気を感じるところがある。



紀州街道

紀州街道は大坂高麗橋から、住吉・堺・岸和田城下を通り、和歌山に至る街道である。近世以前では熊野街道が泉州地域の主要幹線道であった。しかし、海沿いの町が発展していくにつれ、慶長7年(1602)頃に沿岸部を結ぶ街道として成立したようである。五街道などの主要街道ではなく、海運の発達した大坂湾岸での補助的な街道であった。

江戸時代初期、紀州徳川家は、大和街道を通り伊勢松坂を経由して参勤交代を行っていた。しかし、第六代宗直以降は、紀州街道を通り大坂、京、東海道を抜け江戸へ向かう道程へと改めている。これは第八代将軍徳川吉宗を出した紀州徳川家の家格に見合うように、行列の威容を道中で示



すためであったと言われている。このように参勤交代に使用されることで、いっそう街道の整備が進み、町場の発展とともに多くの商家や町屋が建ち並んだ。また、堀の両端で鍵型に曲がっているが、これは城下町でよく見られる遠見遮断によるものである。



この屋敷の説明板があるくらいなので歴史的な建造物と思われるが、ご覧のように売物件のポスターが貼ってあった



多くのお寺にはソテツが植えられている。なぜ？



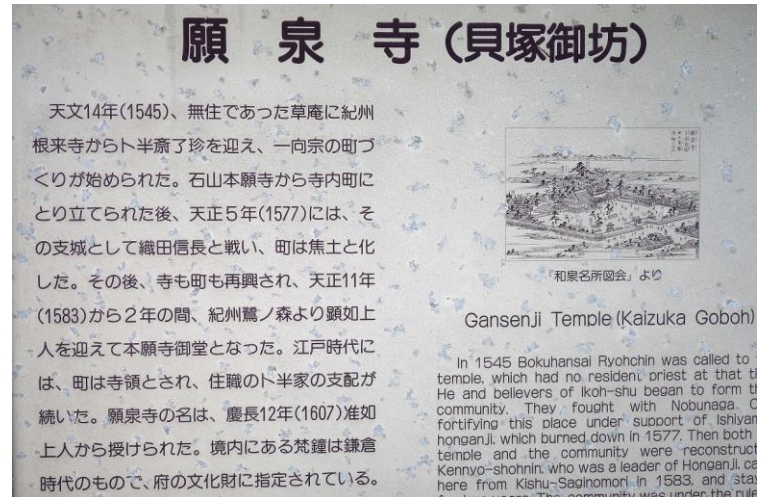
岸和田城（寛永 17（1640）年、岡部宣勝の入城時は 6 万石）



岸和田港

貝塚

貝塚市は岸和田市の南にある。南海本線貝塚駅近くに立派な浄土真宗本願寺派の願泉寺というお寺がある。この町はこのお寺を中心に発展してきた寺内町だ。沿岸部には両側を工場に挟まれてロケーションはよろしくないが二色浜海水浴場があり、その先の埋立地も海浜緑地となっている。また、東洋の魔女と呼ばれたニチボー貝塚女子バレーボールチームの母体であるニチボー（現ユニチカ）貝塚工場跡は JR 阪和線沿いにある。



ボダイジュ (シナノキ) の花芽



願泉寺には一時期、石山本願寺を追われた浄土真宗のトップ顕如がいたそう







貝塚港



貝塚のウォーターフロント（緑地とマンション群）

泉佐野～泉南

泉佐野市は堺（自由都市）、岸和田（城下町）、貝塚（寺内町）などの計画的につくられた町並みと違って、自然発生的にできたようで、迷路のような路地が古い家並みや倉とともに今もたくさん残っている。倉は、江戸時代に、「食野（めしの）家」「唐金（からかね）家」などの豪商が活躍した名残とか……。また、ガッチョやアナゴ、その他大阪湾の恵みがたくさん水揚げされる泉佐野漁港がある漁師町でもある。そこに閑空りんくうタウンのビル群ができて、全体としては新旧の建物が混在し、他では見られない独特の雰囲気醸し出している。また、貝塚、泉大津と同様に織物の町でもあり、特にタオルの生産は全国シェア 42%である。

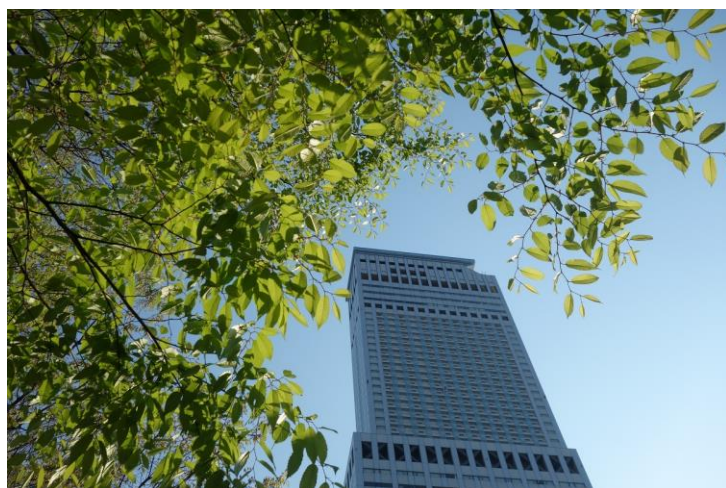
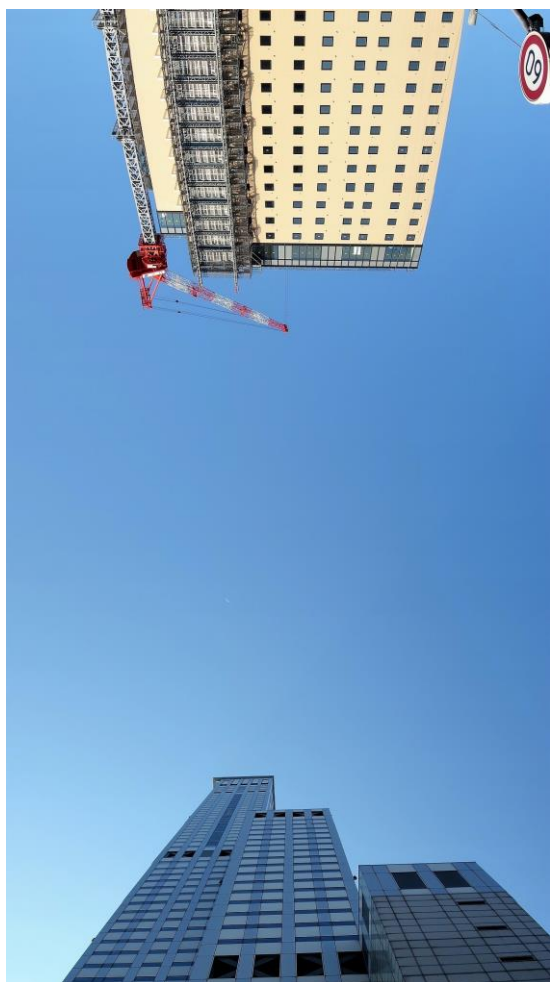
泉南市の海には人工海岸であるが白い大理石を敷き詰めた「恋人の聖地」といわれているビーチが広がる。





奥に見えるのはりんくうゲートタワービル





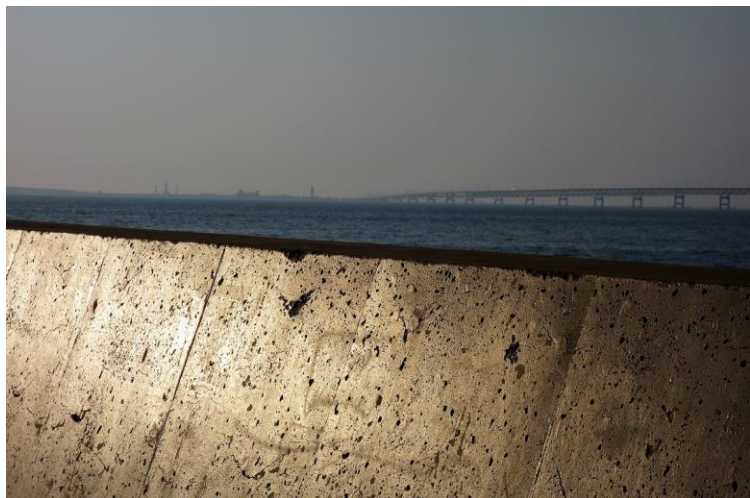
りんくうゲートタワービル



泉佐野漁港



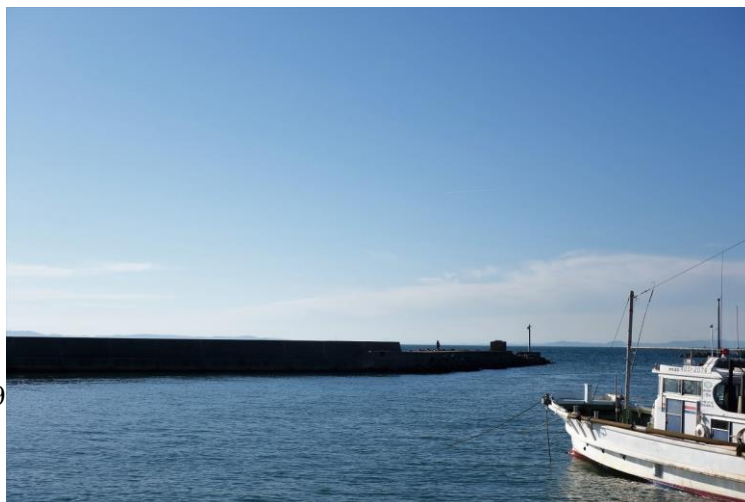
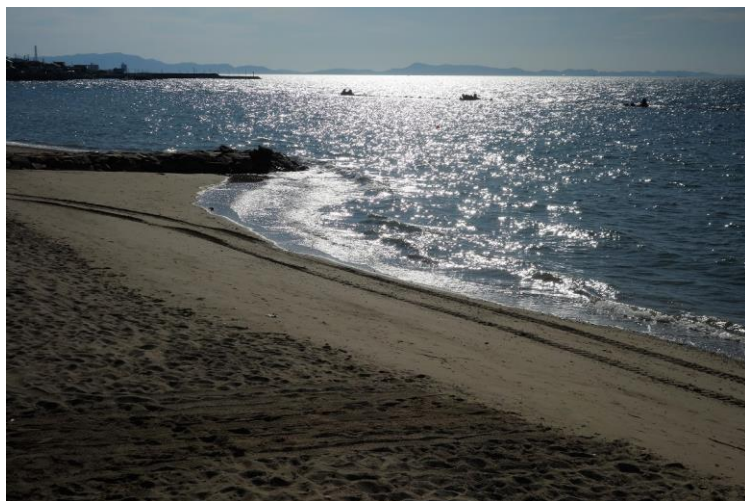
ガッチョ（唐揚げにしたものはビールのあてに最高）



スカイゲートブリッジ(左写真)とマーブルビーチ (右写真)

阪南

阪南市と聞いても「大阪にそんな市があったの？」と思われる方が多いようだ。泉佐野以南にある町だ。目立った産業はないが、海や山の自然はとても豊かだ。海は穏やかな自然海岸（砂浜）が続き、遠くに淡路島や関空が見渡せる。この海岸線に沿って漁港が多くあり日常生活で海とのかかわりを感じる町並みが点在する。透明度が高く、海藻が茂る海沿いを歩いていると潮の香りが漂ってきた。また、夕日が殊の外美しかった。大阪湾にもこんな夕日が沈むのかと驚いた。







阪南～岬

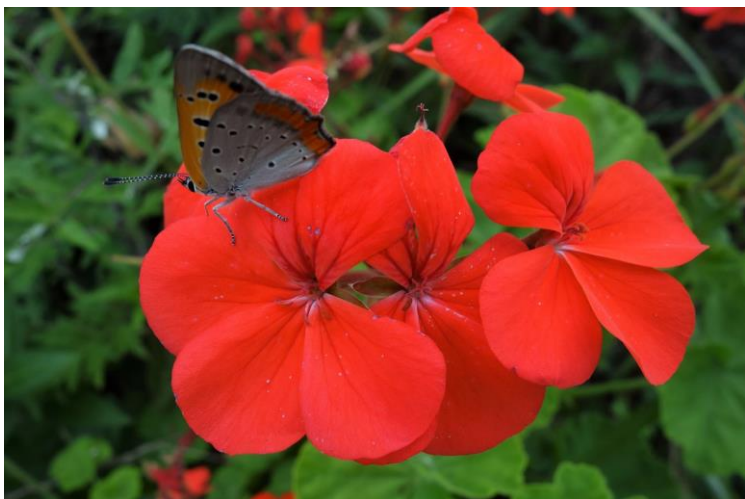
阪南市南部から岬町は南海電車が走る中で海に最も近い所だと思う。昔、テレビで「なーん なーん 南海電車、南の海を走ってく」という歌が流れていた。おそらくこの辺りをイメージしたものだと思う。箱の浦団地という大きな分譲住宅がある。海が見える通勤圏の住宅として開発されたと思う。都会で働き、休日は海辺で過ごしたいと考えるサラリーマンが購入したのだろうか。少し南の岬公園（2020.3 閉園）裏は山が海まで迫っているために海岸には大阪では珍しい磯海岸がある。紀州街道は泉佐野で熊野街道に吸収されて山間部を通り和歌山市に至る。一方、孝子街道はもう一つの紀州街道と呼ばれ、泉佐野から岬町深日（ふけ）まで海沿いを通り、そこから孝子峠を越えて和歌山市に至る。





南海電車（南海本線）







南海電車の歌（歌：伴久美子）

朝は南の陽をうけて
あまいあかるい、あったかい
若い人魚の歌声のせて
走る電車は緑の電車
なーん なーん 南海電車
南の海を走ってく

海は青いよ、白い波
キリン ライオン お友達
みさき公園みんなをのせて
走る電車は
緑の電車
なーん なーん 南海電車
南の海を走ってく

<街道を歩いて>

堺から岬町深日までの紀州街道（約 47km）を歩いた。歴史的街道ということで、レトロな雰囲気、古い町並み、歴史的建造物などに出会えるのではとの期待をしたが、そのような期待はほとんど外れた。各市に町並み保存施策のようなものが無ければ、古きものは消え行く運命にあるのは当然のことかも知れない。しかし、城下町である岸和田市には街道沿いに古い町並みが続く景色が見られるところがあった。そこは「本町地区」であり保全計画が策定されているようであった。

一方、街道の少し西側の海岸沿いも歩いたが、こちらは泉佐野以南で、予想以上の素敵な風景に巡り合えた。泉佐野～泉南は人工改変されたビーチにはなっていたが対岸の関西空港にマッチした現代的な海岸風景が見られたし、阪南以南に残された自然海岸では、瀬戸内の穏やかな海と漁村風景が見られた。各市にはそれぞれ自慢の夕日スポットが設定されているようだ。